

わたしはイエロー

弘前市立第四中学校

石戸 たまき

子供の成長に大人は大きく影響を与える。だからこそ私は保育士になり、子供の成長においていい影響を与えられる人になりたい。

この本には、日本と英国の異なる文化、風習、考え方がたくさん出てくる。その中でも私が興味深いと思ったのは、幼児教育に関するものだ。

英国では、言葉を使った自己表現力、創造性、コミュニケーション能力を高めるために、演劇が重視されているということに関心を持った。英国の幼児教育施設は、演劇的な指導を日々の教育に取り入れているらしい。表情や言葉を通して感情を表現することを教え、自分の感情を正しく他者に伝えられるように訓練している。感情表現の仕方を知ることが、他者の気持ちを読み取ることにもつながるだろう。私はこの教育方法に感銘を受けた。日本でも人の感情が理解できない子供はたくさんいると思う。そのため他者を傷つけてしまったり、トラブルになってしまったりすることがある。感情を

表現する方法は学校で教わるものではないが、人間関係において必要なことであるため、日本にも取り入れるべきだと思った。

「シティズンシップ教育」というものも登場する。これは、他者を尊重しながら市民として社会に参加し、その役割を果たせるように教育することだ。日本という、社会の「公民」などにあたるだろう。社会に主体的に関わっていく姿勢を学ぶことで、将来の世界の在り方が変わってくるのだと思う。

「決めつけないでいろんな見方をするのが大切」という言葉が出てくる。私はこれにとっても共感した。人は他者を見るとときに見た目だけで判断し、偏見を持った態度で接してしまふことがある。このような態度は相手にも意外と伝わっているものだ。いい関係を築いていくためには、先入観や偏見を取り払い、その人自身を見ようとするのが大切だと思う。「ぼく」の友達に対する態度はとても大人だ。人種差別丸

出しの移民の子とも、趣味が合うという理由から仲良くなり、差別的な発言をたしなめながらうまくつきあっている。この子も少なからず親の影響を受けているのだと思う。それを客観的に見てつきあっているのだから尊敬に値する。また、同じ東洋人であることから「ぼく」を気にかけてくれる中国人の生徒会長も登場する。彼は、「ぼく」の前で東洋人を差別するような発言をした上級生に暴力の脅しをしよう。しかし、「ぼく」はその仲間意識はわからない、と母ちゃんに相談している。「ぼく」の割り切った性格は簡単にまねできるものではないと思う。私は周りに流されて悪口を言ってしまう。やったり、やるべきことがあるとわかっているのに遊んでしまったことがあつた。友達をやっていたからつい自分もやってしまった、そんなことはよくある。しかし、「ぼく」はその子を認めながらも譲れないところは譲らない、正しくないところは注意するという強さを持っている。周りに流されず、自分が仲良くなりたい人と友達になるところや、曲が

つたことは許さないところを見習いたいと思つた。

「母ちゃん」は私の母によく似ている。私も悩んだ時や不満がある時、よく母に相談する。そんな時、母は私の考えを肯定した上で、客観的な視点からアドバイスをしてくれるのだ。言語化すると感情が整頓されていく気がする。「ぼく」がブルーな気持ちから始まつた中学校生活を楽しめているのは、事あるごとに話を聞いてくれる母ちゃんがいたからこそだと思う。私が今の感情を表すとしたら、「イエロー」かもしれない。イエローには幸せという意味がある。私は喜怒哀楽さまざまな感情を抱きながら少しずつ成長している。その成長には母との会話が不可欠だ。経験し、相談し、消化し、成長する。そんな環境にいられることが幸せだ。

この本を読んでたくさんのお話を教わつた。この世界はまだまだ私の知らないことであふれている。「子供にいい影響を与える大人」になるために、「ぼく」と一緒に成長していきたい。